

第14回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

# 「蝉と花火」

千葉県 西武台千葉高校一年 山寺 杏奈



賢治のまちから  
**全国高校生★童話大賞**

優秀賞〈銀の星賞〉

### 『蟬と花火』

千葉県 西武台千葉高等学校一年 山寺 杏奈

「ごめん、覚えてないや」

親友である薄井仁は、そう言つて困ったような顔をした。仁がつい、この前の交通事故で、記憶喪失になつてしまつたと聞いてはいたが、聞くのと実際に身をもつて実感するのとは違う。

坂木裕也が受けたショックは意外にも大きいものだつた。「本当に覚えてないのか」

やつと言葉に出た裕也の問いかけに、仁は申し訳なさそうに頷いた。いつもなら「嘘だよ」と小馬鹿にしたように笑うくせに、今日はどれだけ待つても、その一言を言う事は無かつた。

家族のことも忘れているというのだから、ただの親友でしかない裕也を覚えている訳もなかつたのだが、やはり、どこか覚えているのかも知れないと期待していた。

のんびり記憶が戻るのを待てばいいのかもしれない。

だが、裕也にそんな余裕と時間は残されていなかつた。

訳あつて残り七日間しか、ここに居られないのだ。

「なあ、今、時間空いてるか？」

今が長い夏休みだということもあつて、七日間という短い時間でも、学校のある日と比べたら大いに時間はあつた。

裕也の質問に、仁が「うん」と答えると、裕也は仁を引っ張り、出かけた。

二人で遊びに出かけた場所や、学校帰りにしたこと、そんなことを再現するうちにもしかしたら思い出すのじゃないだろうか。

裕也はそう思い立ち、仁を最初の場所へと連れて行つた。

「暑い日はよく、この川で水遊びしたんだ」



# 賢治のまちから 高校生☆語彙大賞



小さい頃から、よく一緒に遊んだ二人は、夏の暑さでどうしようもなくなつた時、この川に来ては服をびしょびしょに濡らし、母親らに揃つて叱られていた。

びしょ濡れとまではいかないが、高校生になつた今でも、暑い帰り道にふらりと寄つては足を冷やしながら雑談し、ふざけ合つた。

当時は大した思い出ではないのだが、今となつてはそんな日常すら、大切なものだつたと思える。

仁は、じつと静かに川を見つめていたが、やがて溜息ためいきを吐いた。  
「ごめん、やっぱりわからんねえや」

「そうか……」

仁の答えに裕也は落胆らくutanしたが、まだ初日ではないが、あと六日間もある、そう思い直した。

「じゃあ、もう日も落ちてきたし、俺は帰るよ」

「またさ、明日も付き合つてくれないか？」

「そうだな、どうせ暇ひまだし、家に居ても仕方がないし、いいよ」

家族のことも分からなければ、安息あんそくの場所はないのだろう。

苦笑いで答えた仁に、裕也は早く記憶を取り戻さなければ、という使命感に駆られた。

「じゃあ、また明日」

「じゃあな」

そう言つて去つていく親友の背を、裕也は時折、振り返りながら見つめていた。

さて、今日はどこへ連れ出そうか。

携帯でのやりとりで決めた待ち合わせ場所へと向かいながら、裕也は考えた。

仁にとつて、そして裕也にとつても思い出深い所。

思い当たる節が多すぎて困つた。

「おーい、こっちだよ」

かれこれ考えていた間に、集合場所である昨日の川べりに着いてしまつた。

先に到着していた仁は、手を振りながらこちらへと駆けてくると、息を整えながら、聞いた。

「それで、今日はどうするんだ？」

「どうするかな……」

「どうするかなって、決めてなかつたのか」

「どこか、呆れたかのようない方に、裕也は少し懐かしさを感じた。たとえ、それが良いことだろうが、悪いことだろうが関係ない、素直に互いに言い合う。

裕也は仁のその呆れた言い方に、素直さを感じたのだ。  
一步ずつではあるが、進展はしていたのだろう。

「そうだなあ、仁は何したい？」

「うーん、少し腹が減ったかな」

そう言いながら腹をさする仁の姿に、裕也は次の目的地を頭の中で弾き出した。

「じゃあ、駄菓子屋なんてどうだ？」

そう問うと、仁は頷き返した。

二人は、ここからそう遠くない駄菓子屋へと、のんびりと話をしながら歩いた。

「覚えてるか？俺がお前の家に泊まつた時、お前は寝相が悪すぎて、俺をベッドから突き落としたよな」

「え、そうなのかな？」

「そうだよ」

そう笑いながら言つてやると、仁はぱつが悪そうに頭を搔いた。

「他にもあるぞ」

「まだあんの？」

「うん、後はな……小学校の時、好きな子が一緒で大喧嘩したな

「本當か、それ」

裕也はどこか照れくさそうに頭を搔いた。

その様子を見て、可笑しそうに笑う裕也に、それにつられた様に苦笑いを浮かべる仁。



そんな思い出話のような、はたまた、面白話のような会話に花を咲かせて  
いると、目的の駄菓子屋が見えて来る。

その駄菓子屋は、店の前に幾つかの古いベンチを置き、店の奥には店主である『駄菓子屋ばあ』と皆から呼ばれている、優しそうなおばあちゃんが一人居るだけだ。

盗まれても気付かなそうな商品の並べ方だが、『駄菓子屋ばあ』の朗らかな優しい笑みがそうさせるのが、不思議と万引きされたなどの話は一切聞かなかつた。

駄菓子屋の手前まで来ると、俺は立ち止まり、店に引き込まれる仁を呼び止めた。

「ちょっと待った」「ん？」

不思議そうな顔で振り返った仁に、俺は歯を見せて笑いながら言った。  
「いつも、ここで俺たちはジャンケンをすんだ」

「え、なんでだ？」

「あのな、ジャンケンして負けたほうが何か、駄菓子をおこ奢る」

それが、毎回毎回、店の前でやつては勝つた、負けたと騒いで笑っていた日常。

「へえ、面白そうだな」「だろう

確かに、初めてこれを提案した時にも、仁は同じことを言つた気がする。そんなことを思いながら、裕也は右手で拳をつくった。

「いくぞ、最初はグー、じゃんけん」「ポイっ！」

裕也が出したのはパー、そして仁は力強く拳を握り、グーを出した。

「だあ！俺の負けか！」

悔しそうに地団駄を踏む仁に、裕也は思わず吹き出して笑つた。

じつをいうと、このジャンケンには秘密がある。

仁は、こういう何かを賭けたジャンケンとなると、力が入るためか、高確率でグーを出す癖くせがあった。

そのことに本人は気付いていないのが、また滑稽こっけいだつたりもするので、あって裕也は仁にそのことを教えることは無かつた。

「じゃあ、俺はイ力の酢漬すづけで」

「済いんだな」

ぶつくさと咳くふやきながら店へと入つて行つた仁を見送り、裕也はベンチに腰かけた。

やはり、仁は仁だ。

少し恥ずかしいことがあると頭を搔く癖くせ、悔しいと地団駄を踏む癖、さつきみたいなグーを出す癖。

なんだ、意外と覚えてるんじゃないかな。

この様子なら七日間しちじまんという期間で記憶を取り戻せる。

そんな安心で機嫌きげん良く座つていると、裕也とは正反対に少し機嫌を損ねたような仁が、右手にイ力の酢漬け、左手にはアイスキャンディを持つて店から出てきた。

「お、ありがとう」

「どういたしまして」

イ力の酢漬けを裕也に手渡すと、仁は並ぶように裕也の隣へと腰かけた。早速、裕也はイ力を食べ、口をすぼめた。

「酸っぱい、でも美味しい！」

「酸っぱいのが好きっていう理由が分からないよ」

そう言って仁は、アイスの袋をペリペリと剥がす。

よく見れば、そのアイスは必ずと言つても良いほど、仁が毎回食べる物だった。

「知つてる？　お前、来るたびに、そのアイス食べてるよ

「そうなのか？」

そう言ってどこか納得なつとくしたように頷く仁に、裕也は尋ねた。

「何？　なんか納得なつとく気げだな」

「ん、自然にこのアイスを手に取つてて……氣が付いたらつて感じだから、もしかしてそうじゃないかと思つたんだよ」

どうやら癖だけでなく、好きな食べ物までは自然と覚えているらしい。食い意地が張つているのか、どうなのか。

「でもよ」

仁は、アイスを舐めたり、かじったりを繰り返しながら言った。

「何か、お前と居ると気楽でいいや」

「……記憶が戻ったのか？」

「いや、なんか本能的っていうか」

一瞬、戻つたのではと期待したが、そうではなかつたらしく、裕也は少し残念がつた。

だが、記憶がなくとも仁は裕也と過ごす時間を、特別に思つてくれている。それは少し、嬉しかつた。

「な、明日も出掛けようぜー！」

「あー……『ごめん』

予想外の答えに、裕也は仁の顔を凝視した。

「なんか、遠くの病院行くんで、四日間くらい家を空けるんだ」「そう、なのか」

四日間。

そうなると後は七日目しか残つていない。

あと、たつた一日という時間で思い出してくれるのだろうか？  
そんな疑問が、裕也の不安を強く煽りながら、裕也は笑いながら「わかつた」と返した。

最後の日。

今度は前回と違つて、行く場所は決まつていた。

また、あの川べりに行くと、真っ暗な中で一人星空を見上げる、仁の姿があつた。

裕也は、駆け寄つて声をかける。

「仁ー！」

「あ！ まつたく、いつも遅れるよな」

早速、文句を言つてきた仁に、裕也は「『ごめん、『ごめん』と謝ると、歩き出した。

「さ、行こうか」

「なんだよ、今日はやけに急かすな？」



「時間がないからね  
ぽつりと、呟くように言つた裕也の言葉に、仁は不思議そうに小首を傾げ  
る。

「時間がない?」

「うん、だから急いだ  
すたすたと歩きだす裕也に、仁は慌あわて付いて行つた。

しばらく歩くと、大きな川にたどり着いた。

いつもの川べりより川幅が大きく、立派な橋まで架かっている。

一体、裕也はここで何をしようというのか。

仁は疑問に思つたが、それを口に出す前に裕也は再び歩き出す。  
立ち入り禁止と書かれた札を通り過ぎ、橋の上にまで来ると、裕也はよう  
やく止まつた。

「なあ、こんなところに来て何がしたいんだ?」

「まあ、いいから待つててみなよ」

楽しげにそう言つと、橋の手すりにぴょんと飛び乗つて腰をかける。

仁も同じように手すりによじ登ると、裕也の隣に腰をかける。

橋の下は真っ暗で何も見えず、川の流れる音だけが勢いよく聞こえ、少し  
不気味さもあつた。

仁は少し不安を感じていると、ふと、夏を感じさせる独特な音が聞こえて  
くる。

仁は驚きつつも、慌てて視線を空へと向けた。

「わあ

ぱんっと乾いた音を立てて、綺麗な花を夜空に咲かせる花火。

次々と休む間もなく打ち上げられる花火は、本当に綺麗で、美しいものだ  
つた。

「なあ、裕也……」

すごいな。

そんな言葉をかけようとしたのだが、言う事はなかつた。  
いや、実際は言えなかつた。



仁の隣に座る裕也の体は、まるで川の水のようにゆらゆらと揺れながら透けていった。

「裕也……」

仁は次の瞬間、大きく目を開いた。

裕也のことを思い出したのだ。

「ちゃんと思い出してくれたか？」

「思い出したよ」

仁は交通事故で記憶喪失になつた。

だが、頭を打ちつけたものの、体にはほとんど傷がつくことはなかつた。

轢かれるあの瞬間、裕也が仁を助けようとラックの前から押し出したのだ。

そのおかげで仁は頭を打つたが、死までは至らなかつた。

「お前は、生きてるんだよな？」

確かにめようと仁は裕也の肩を叩こうとしたが、虚しく宙を掴んだだけだった。

「嘘だろ……まさか死んでなんかないよな？」

「ううん、死んだんだよ、俺は」

信じられない話でもあつたが、現に触れないとなると、どうにも信じられないという言葉で終わりそうにもない。

「ごめんな」

仁は思った。

きつと自分を恨んでる。

だが、裕也は明るく笑つて答える。

「何が？　お前が俺に何かしたっけ？」

「ほら、俺があの時、飛び出してせえいなければ……」

「そんなことは、どうでもいいね」

あつけらかんとそう言つてみせる裕也に、仁は不思議に思った。

だつたら、どうして再び会いに来てくれたのだろう？

「俺は、裕也が俺のこと忘れたままだつたら嫌だな、そう思つて來たんだ」



こつちに戻つてくるのは大変で、ようやく七日間のみ戻ることが許されたのだと言う。

「それに、ちゃんとお別れもいいかつたしな」

「そうだよな、記憶がないまま勝手に逝かれちゃ、俺も嫌だわ」

当たり前だと言わんばかりに裕也は笑つた。

その時、一段と大きな花火音が鼓膜こまくを響かせた。

二人は、ほぼ同時に顔を目の前の花火へと向けた。

「この花火が終わつたらさ、ちょうど七日間で、俺は消えちゃうんだ」

花火を見つめながら、裕也は少し寂しそうに言つた。

「そうなんだ……」

「そう、だから一人で花火を見るのもこれで終わりだな」

その言葉に仁は少し鼻を詰ませた。

この場所を見つけたのは小学生になりたての頃。

危ないからと、やはり母親に怒られていたのだが、それでもこつそりと行つては一人で打ちあがる花火を称賛していた。

休むことなく次々と打ち上げられていた花火だったが、急にその勢いは消え、真っ暗な夜空だけが取り残される。

この後、最後の一発が打ち上がり、打ち上げ花火は終了する。

もうすぐ、裕也は消える。

「裕也」

「ん？」

「ありがと」

「……こちらこそ」

どの花火より高く、そして大きな音と光を散らしながら、最後の一発が打ち上げられた。

花火が終わつても、仁は帰ろうとせず、目を瞑つむつてその余韻よいんに浸つっていた。

その隣には、こと切れた蝉が一匹、空を見上げるかのように仰向けになつていた。

